

**●語源**

マツの語源は、「待つ」にあるとされています。

マツは、古くから神が依る樹とされてきましたので、「神を待つ木」ということで、マツとなったのだと考えられています。

学名のピヌス(Pinus)は、ギリシア語で「筏」の意味です。これはマツが古くから船材として使われたことに由来しています。だから、マツは海の神に捧げられる樹でもあったようです。

**●信仰**

マツは、瑞々しく生気に満ちた緑の葉を常につけている常緑樹——常盤木(ときわぎ)——として、古くから神の依代と考えられてきました。日本の神信仰は、照葉樹林のなかで育まれてきましたが、マツに対するこうした信仰はその一環だといえましょう。

それは今でも正月の門松のようなかたちで、身近なところに残っています。門松はその年の歳神が降りてくる依り代なのです。門松が日本の文献に初めて見られるのは11世紀末の「堀河院百首」だそうです。その頃から風習として定着していたようです。

そのような信仰の対象としてのマツでもっとも有名なものは、奈良・春日大社の「影向(ようごう)の松」でしょう。影向とは、神仏が一時的に姿を現すことです。このマツはクロマツですが、古く春日権現記にも記されている巨木で、この前に春日大明神が翁の姿で現れ萬歳楽を舞われたといわれ、神の依代とされてきました。これが、やがて芸能の神の依代として一般化され、能舞台の鏡板に老松のかたちで描かれるようになりました。



能舞台の老松

このようなマツ信仰のものは、古代中国にありました。中国では、国家成立以前の共同体の原基を社稷(しゃしょく)と呼び、その社に土地の神と穀物の神を祀りましたが、その場に植える木としてはマツが第一のものとされていました。それ以前から松柏(マツとカシワ)は百木の長とされていたのです。それが伝わってきて、日本の神信仰にも影響をあたえたといわれています。

また、西洋でもマツは聖なる木と考えられてきました。古代ギリシアでは、主神のゼウスを表す木がカシであるのに対し、マツはディオニュソス神の象徴とされていました。ジャック・ブロスの『世界樹木神話』によると、「ディオニュソスは、いくつかの神格の合体として形づくられたもので、さまざまな面をもっているが、マツというのはその一面を象徴するものである。キツタの樹、ブドウの樹というのもディオニュソスの別の側面を象徴している」「デルフォイの神託は、コリント人に対してマツを神のごとく崇めるように命じ、彼らはマツの樹を使って鮮紅色の顔と黄金に輝く身体をもった二体のディオニュソス像を造った」といわれています。

そして、古代ローマでは、春分の頃おこなわれる神の甦りを祝うキュベレとアッティスの祝祭において、神の甦りを促すために、アッティスの大司祭はみずからの腕を刃物で斬り、その血を捧げ物として聖なるマツの樹に奉納するのです。これは、聖なるマツの樹の祝祭なのです。

古代ユダヤ教の世界では、樂園を追放されたアダムは、ヘブロン谷で死んで埋葬されましたが、その墓の上にはレバノンスギ、イトスギ、マツあるいはヤシの三本の樹が生え出しました。それは、大天使ミカエルが、アダムの罪——それは人類の罪でもある——の贖いが成し遂げられる時は、アダムの墓に生える樹に由来するであろうと告げた、贖いの樹だったのです。それはまた、父(レバノンスギ)・子(イトスギ)・聖霊(マツ)の三位一体を象徴するものでもありました。(ヒノキの項目参照)

『金枝篇』のジェームズ・フレーザーも、毎年マツの樹に吊るされる人形で表現される死と再生の儀礼について語っています。

## ●神話伝説

マツの靈性に根ざした説話伝説として、たとえば「阿古耶(あこや)の松」があります。奥州信夫郡千歳山の老松の精が近くに住んでいた阿古耶姫の夢枕に立ち、斧で切り倒さるので引導を渡してほしいと頼む。その願い通りに姫が千歳山に行き引導を渡し、あとに若松を植え菩提を吊ったといわれています。

また、山口県都濃郡青柳浦の「下り松」は、敏達天皇9年7月のある夜、大きな星が降って七昼夜輝き、「わが靈をこの地に祀れ」と神のお告げがあったので、神の靈の下ったマツということで「下り松」というと伝えられています。

特定の条件の下で松に燈明や竜燈がとめるのが見えるという「燈明松」や「竜燈松」の伝説も、徳島県那賀郡大竜寺や長崎県上五島野崎島など各地に残っていますが、こもやはりマツの靈性にもとづくものでしょう。

また、そのマツの前で転ぶと袖を取られるとか、袖をちぎって手向けるとか言い伝えられる「袖取松」(そでとりまつ)が各地にあります。これはマツの霊性と袖を取ると霊が安定するという呪術が結びついたものです。

マツには、貴人や武将、さらには天女などが自分の身に着けたものを掛けていったという伝説が、さまざまなかたちで各地に残されています。

もっとも有名なのが、天女が降りてきて羽衣を掛けたという「羽衣の松」で、静岡県三保の松原、愛知県宝飯郡をはじめ各地にあります。三保の羽衣の松は『駿河国風土記逸文』に記されています。

宮城県名取郡の「笠掛松」は、実方中将(藤原実方)が死に臨んで、妻子への形見に菅笠を掛けたというマツ。西行が「笠はありて身のいかにしてなかるらんあはれはかなき天が下とは」という歌を詠んでいます。

武将が武具掛けたといわれる「鎧掛松」「弓掛松」「旗掛松」などが各地にあります。福井県敦賀の「笈掛松」は、源義経が奥州に下るとき、この松に笈を掛けて休んだとされるマツで、枝がみな京都の方角を向いているのは、義経の帰京の気持ちが作用したものだと言われている。

高僧が使い終わった箸を土に刺したら、それが根づいてマツになったといわれている「箸立松」が各地にあります。新潟県北蒲原郡の箸立松は、親鸞聖人によるものとされています。義経・頼朝・親鸞など貴人が雨宿りしたという枝葉が笠のように広がった「笠松」も各地に見られます。

## ●生産文化

北海道には植林されたカラマツ林が多い。それは、カラマツがスギやヒノキが生育できない寒冷地でも育つので、北海道に多かった炭鉱の坑道を支える杭材として使うために植林されたからです。エネルギー革命で炭鉱が閉山していくにつれて、カラマツも要らなくなって林は放置されるようになりましたが、それ以前は、カラマツは、黒いダイヤといわれた石炭を掘り出すためになくならない生産材だったのです。

アカマツは健材として使われてきましたが、幹が曲がっているため、柱には不向きで、主に梁に使われてきました。曲がり具合を生かして、どううまく使うか大工の腕次第だったわけです。また、アカマツは油分をたくさん含んでいるので、薪として好適で、火力が強いので特に窯業などでは好んで使われてきました。古代以来中近世まで、製鉄などの精錬に多くの山林が荒廃するまで燃料に使われ、より逆境に適應できるアカマツ林が二次林として広がっていき、今度は、そのアカマツが薪炭材として使われるようになりました。さらには、第二次世界大戦中には、ガソリンが不足したとき、アカマツの根から松根油と呼ばれる油を抽出して航空機燃料として使おうとしたこともありました。

## ●文藝

**詩：**

北原白秋「落葉松」

からまつの林を過ぎて、  
からまつをしみじみと見き。  
からまつはさびしかりけり。  
たびゆくはさびしかりけり。  
…(中略)…  
世の中よ、あはれなりけり。  
常なれどうれしかりけり。  
山川に山がはの音、  
からまつにからまつのかぜ。

**和歌：**

たまきはる 寿(いのち)は知らず 松が枝に 結ぶころは 長くとぞ念(も)ふ 大伴家持  
巻向(まきむく)の 檜原もいまだ 雲居ねば 子松が末(うれ)ゆ 沫雪(あわゆき)流る 万葉集  
卷十

琴の音に 峯の松風 通ふらし いずれのをより しらべそめけん 斎宮女御  
松の葉の 細き葉毎に 置く露の 千露もゆらに 玉もこぼれず 正岡子規  
うすくれなみに 松芽のながき 松やまに 光しづかなる 雨はそそげり 生方たつゑ  
庭松の いや濃き緑 ひかるまで 雪をかつぎ 年あらたまる 結城哀草果

**俳句：**

門松の立ち初めしより夜の雨 一茶  
寝て居れば松や松やと壳に来る 子規  
年々に松打つ柱古りにけり 虚子  
松立てて空ほのぼのと明る門 漱石  
女てふさびしさに松立てにけり 桂子  
一人子と閑かに住めり松飾 草城

**歌謡：**

(倭建命が、東国遠征の帰途、伊勢尾津の一本松で置き忘れた剣がそのまま残っていたのを見つけて歌った。古事記)

尾張に 直にむかへる 尾津の崎なる 一つ松 吾兄を 一つ松人にありせば 太刀佩けまし  
を 衣着せましを 一つ松 吾兄を

**能：**

われ三保の松原にあがり。浦の景色を眺むる所に。虚空に花降り音楽聞え。霊香四方に薫ず。  
これただごとと思はぬ所に。これなる松に美しき衣かかれり。「羽衣」

**狂言：**

松のめでたきと申す仔細は、一寸延ぶれば、色とこしなへにして、じょう千年、万年のよはいを保ち、なんぼうめでたき物にて候「松脂」

民謡：

目出度々々の若松様よ 枝も栄えて 葉も茂る「花笠音頭」

随筆：

永井荷風『日和下駄』

銀杏に比すれば松は更によく神社仏閣と調和して、あくまで日本らしくまた支那らしい風景をつくる。江戸の武士はその邸宅に花ある木を植えず、常盤木の中にも殊に松を尊び愛した故に、元武家の屋敷のあった処には今もなお松の姿にそぞろ昔を思わせる処が少なくない。市ヶ谷の堀端に高力松、高田老松町に鶴亀松がある。…小名木川の五本松、八景坂の鎧掛松、麻布の一本松、寺島蓮華寺の末広松、青山竜巖寺の笠松…

幸田文『木』の内、「えぞ松の更新」

こちらへきてごらんさい、という。やっとそれがみえた。ほうとばかり溜息をついて、その更新に見入った。それはバカでもわかる、まさに縦一文字に生え連らなつた太い幹たちであった。えぞという大きな地名を冠にかち得ているこの松は、ほんとうに真一文字の作法で、肅然と並びたっていた。威圧はおぼえないが、みだりがましさを拒絶している格があった。清澄にして平安、といったそんな風格である。むざとは近よらせぬものがある。

青木玉『こぼれ種』

南伊豆に、早咲きの河津桜を見に行つたときからの知人が、「特別にどうというのではないのですが、私たちの地区のみんなが大事にしている松があるんですよ。海にある岩の上に一本だけ生えていて、私のおばあさんが若い頃から見ていた木なんです。だから百年、もっとになるかも知れない。元気であおあおして、いつも励まされる気がするんです」と云う。

…

門松を立ててお正月を祝い、六日の夜おろしたあと、その穂先を摘んで土に挿しておく。それを鳥総松(とぶさまつ)という。鳥総というのは、木こりが木を切つたあと、再び新しい芽が萌えるように念じる、おまじないのようなものである。穂先だけの松に根が出るとも思えないが、結構いつまでも青い色を残し、緑の少ない冬枯れの玄関先に、春を待つ彩りとなる。鳥総松は、門松の役目を了えた松を労らう思いから始まつたことであろうか、面白い習慣である。

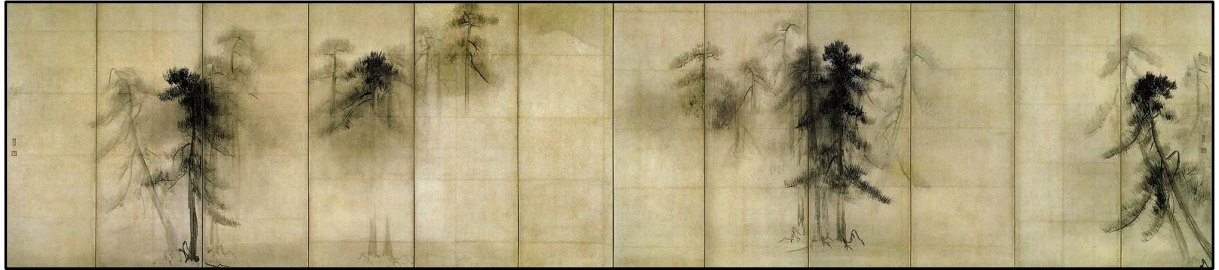
山本健吉『木の今昔』

松は日本古来の美観だ。そして松を賞美する心は、その変化を尊ぶ心ではない。その変らぬ色、変らぬ節操を賞美するである。だが、檜などの雑木林の美しさは、そうではない。外光のもとにおける、光と影と音とのもたらす時々刻々の変化の美観である。

## ●美術

長谷川等伯「松林図屏風」(安土桃山時代 16世紀末の水墨画)は、松林を水墨画で描くことによって、幽玄と余白の美を表現しているとして、日本的美の一つの典型といわれています。

また、室町時代の「日月松鶴図屏風」も、日月屏風に松と鶴が組み合わされている屏風絵で、マツが画面を突き破るように力強く描かれています。



長谷川等伯 松林図屏風

日月松鶴図屏風

## ●工芸

深皿 松に栗鼠図 Edition Lebeuf-Millet オルセー美術館

19世紀後半、日本の浮世絵をもとにフランスで制作されたジャポニズム陶器の一つです。

